

<全体学習中の思い>

最初(中学2年生の時)は、正直とても気が重く嫌で嫌でたまらない授業(時間)でした。後ろ指を指されているようで、ひそひそ笑われているようで…。

私は、全体学習の中で泣いてしまったことがあります。発言をしようと起立した瞬間に何とも言えない感情に襲われてしまいました。その感情とは、真っ暗な闇を感じ、未来に対する希望が失われていく感じと、「今は先生たちに守られている」という安心感がなくなってしまう感じと、中学を卒業したらどれだけの同級生たちが背を向けていくのだろうという不安感です。14歳の私には、この感情をどう整理していただければいいのかわかりませんでした。授業を重ねていたにも関わらず、恥ずかしい限りです。言葉には結局ならなかったと思います。その後、全体学習を重ねていくうちに友達の考えていることや思っていることをたくさん聞くことができました。学年全体に「絆」のようなものが生まれてきたと思います。

そして、授業を重ねるにつれ、段々と(中学3年生になった頃には)、涙も流さなくなってきたように思います。それは、部落問題を真剣に語り合える仲間、そして、先生方がいるという信頼関係が築けたからだだと思います。

<当時を振り返って思うこと>

全体学習のおかげで今日の私があります。それは断言できます。この全体学習がなかったら私は今頃、就職も結婚も諦めていたと思います。自分を強くしてくれたのは、何度も何度も意見をぶつけ合って討論してきた仲間と、ずっと見守っていただいた先生方です。卒業してからも全体学習に費やした時間、仲間、先生方はずっと私の宝物です。差別に直面することは度々ありましたが、全体学習を体験してきたおかげで、私は逃げずに真正面からぶつかることができました。一人で直面するのはとても怖かったです。今でも怖いですが、でも全体学習のおかげで相談できる仲間ができ、一人じゃないんだと幾度、心強く感じたことがあったかしれません。本当に感謝しています。全体学習という機会をたくさん設けていただいていた。あれほど嫌でたまらなかった全体学習の時間が、今や私の人生になくてはならない時間になっていたとは…。卒業して社会に出てから本当に大切な時間だったなああとよく思います。そして、私みたいに弱い人間でも、全体学習によっていつのまにか強くなっていたように、たくさんの人たちが差別に向き合える力、乗り越えられ

〇〇先生へ

「差別・被差別を超える」を拝読させていただきました。

先生が長年、部落問題について携わっていることは知っていましたが、こんなに膨大な資料を残されているとは全く知りませんでした。本当に尊敬します。

そして、部落問題について学習していた頃のことを思い出すきっかけにもなりました。仲間たちが真剣に、正直に意見を重ねていった日々。あんなにもしっかりした意見を中学生たちが発言していたのかと今更ながらに驚きました。

「差別・被差別を超える」には、たくさのいろいろな立場からの意見や感想が載っていました。とても勉強になりました。そして恥ずかしくなってきました。この前、先生に送ったメール(「中学時代に出会った全体学習について思うこと」と「25年が経過して今どのように思っているのか」)の最後に、「私は強くなりました」と書きました。でもそんなことは無かったかも…。読んでいる最中、涙が溢れでてくるのです。この涙はなんだろうと思いつつながら10ページ、20ページ、30ページ、40ページと読み進めていきました。120ページ、130ページ。最後のページまでティッシュが欠かせませんでした。

まだまだ私には語っていないいろいろな思いがあることに気づきました。

先生、聞いていただけますか？

私の祖母は2年前に他界したのですが、字が読めませんでした。それは私が生まれた時からそうだったので何の疑問もありませんでした。戦時中に幼少期を過ごした祖母は、戦争のせいで学校に行けなかったから、字が読めないんだと私の中で勝手に思っていました。小学生の頃、祖母と一緒に風呂に入るのが楽しい時間の一つでした。湯船に浸かりながら祖母が小学生の頃の話をしてくれたのを思い出しました。「家の手伝いとか兄弟の面倒を見るのが先で、たまにしか小学校にいったんよ。たまに行ってもお弁当をもって行ってなかったけん、お昼の時間になるとトイレに閉じこもってやり過ごしていたんよ。」という話を聞いていました。私が小学校高学年になると祖母がノートと鉛筆を持ってきて「Kちゃん、今日も、あ・い・う・え・お、から教えてくれる？おばあちゃん、覚えが悪いけん、何回もごめんあ。」と言って私から教わることが、楽しくて仕方ないように見

えました。祖母のノートには、1ページぎっしりと「あ」、2ページ目には「い」とノートが真っ黒になるくらい一生懸命書かれていました。そんな祖母が大好きでした。

祖父は、私が生まれる前の年に亡くなったらしく会うことがないのですが、土建屋だったようです。父親は5人兄弟の真ん中で、小さい時から貧乏でひもじい思いをよくしたと言っていました。父親が中学生の頃は、部活動で野球部に入りたかったそうです。でも野球部はユニフォーム、靴、ヘルメット、バット等揃えるものがたくさんあり、お金がかかるということで諦めて、ユニフォームと靴だけでいいバスケットボール部に入部したとよく話していました。そういう風に語る父親の言葉には、耳を塞ぎたくなるようなときもありました。

父親も17年前に病気で他界しましたが、私たち子ども3人にひもじい思いはさせまいと一生懸命働いてくれて習い事もたくさんさせてくれました。感謝しきれません。

私が中学生の頃、友達の家遊びに行ったときです。玄関で友達を待っていたら、廊下の向こうで友達と友達のおばあちゃんが話しているのが聞こえてきました。「Kちゃんは、部落の子やからあんまり遊んだらあかんよ。」「そんなんわかつうけん。」と友達。私は一瞬うろたえましたが、聞かなかったふりをしました。そのあとも何事もなかったように遊んでいたけれど、心にポカーンと穴が空いた感じがしていたのを思い出します。

私は、〇〇先生と少し似ているのですが、大阪の大学(大阪外国語大学)を選んだのは、板野から脱出したかったからです。都会の大阪の大学に通ったら差別から抜け出せるのではないかと考えていました。中学生の頃にあんなにたくさん全体学習をして部落問題について勉強してきたのに、差別から逃げ出したい思いが私の中にはありました。でも大阪でも部落差別はありました。クリーニング屋さんでアルバイトをしていた時、パートのおばさんが「あのあたりは部落やから近づかんほうがいいで。」「スーパーに行くならこっちのスーパーにしときや。あっちはやめときや。あそこどころやからな。」と…。私は平静を装っていたけれど、内心ドキドキしていました。「そうなんですか。」必死で振り絞った一言でした。

ある時は大学の友達と会話しているときに、友達が「地方から出てきてマンション借りるとき不動産屋さん『うちは部落と違うから安心してください』って母親が言ってたわ」って言ってケラケラお腹を抱えて笑ってました。また、私は「へえー。」の一言しか言えませんでした。

大学を卒業後、横浜の会社に入社した時、社長が私の所属する部署にやってきて、急に「みんなの身辺調査をしようと思うのだがどうだろうか？」と私の直属の上司

に相談に来ました。私は、また顔は平静を装っていたけれど、髪の毛で隠れていた耳は真っ赤になり、背中からはタラーッと流れ落ちるものを感じながら、パソコンを打ってた手がかすかに震えるのを必死でおさえていました。しばらくして腹が立ってきました。社長に、そして自分に。

何にも悪いことしてないのだから引け目を感じることはない。堂々としようと。これで何か言われたらこっからこんな会社辞めてやるって思いました。

私は完全に忘れていたことがありました。対話です。今まで逃げてばかりでした。部落問題について自分が勉強してきたことを相手に聞いてもらおうとする行動が全くなかったのです。いつもその場をなんとなくやり過ごすことしかできませんでした。結局、社長は調査をしたのかはわかりません。私は、仲のよい同僚たちにも打ち明けることはできませんでした。

そして25歳の時、3年付き合っていた彼氏と結婚する約束をしました。彼氏は同じ徳島県の板野町の人です。でも彼は部落ではない人でした。すぐに彼の母親から電話がかかってきました。内容は、私が部落の人間であるから結婚は賛成できないというものでした。私は、きたか、と思いました。これが結婚差別なんだと。

ここでも私は対話を避けようとしてしまいました。

「いいよ。別に。他のいい人を探したら？」

精一杯の強がりでした。しかし、彼氏は強かった。

「そんな関係ない。同じ人間や。親が間違っている。」と。

心強かった。本当にこの人についていこうと心の底から思いました。

彼氏は何週間もかけて両親を説得し、結婚に賛成してくれるまでになりました。そして今では義理の両親も優しく、本当の娘のように思っていると言ってくれます。

今まで出会った人たちには、とても感謝しています。いい人もたくさんいたし、私にとってそうじゃない人もいたけれど、どの人も尊敬するところがいっぱいあって、今まで私を支えてくれる人もたくさんいました。そして、私も人を支えられる人間になりたいです。

でも思います。

私は逃げてばかりだったのかなあ？

極端かもしれないけど、先生、私は自殺しなかったよ。大丈夫だった。あの全体学習があったから。あの時の仲間がいたから。

〇〇先生、本当に本当にありがとうございます。

追伸

前に徳島に帰省した時に6歳になる甥っ子に聞かれました。「Kちゃんのふるさとはどこ？」って。私は「ここよ。ここのお家がふるさとよ。」と答えました。私が「O君のふるさとはどこかな？」と聞いてみました。すると甥っ子は「お母さんのお腹の中。」と答えました。私はなんてかわいらしいことを言うのだろうと思い、このことをその場にはいなかった甥っ子の父親である私の弟に話しました。そうすると私が想像していた答えとはかけ離れた言葉が返ってきました。「最近の教育や。」と。私はショックでした。ふるさとも言えないの？と思いました。よくはわからないけど部落問題が水面下に沈んでいきそう。そうならないためにも、部落問題が学校だけの授業で終わらず、生涯学習として取り組んでいかなければいけないとつくづく思いました。私は甥っ子のためにも、目をそらさず生涯勉強していきたいと思います。差別に負けない、そして、自分も差別することがないように、今までも。これからも。